

「北京語と普通語の関係解析」

金 荃明 著 李 鴻谷 訳

北京人にとって「普通話（普通語）」は「官話（標準語）」、「北京話（北京語）」は方言である。

北京に一度も来たことのない人にとっては普通語が北京語だと思う人も少なくない。実はその両者に区別がある。一般人はもちろん、語学者でもこの両者の関係を明確に説明するのはそう簡単ではないだろう。本論は以下の三点から両者の相違を究明してみようと思う。

一. 北京語と普通語の特殊な関係

北京語と普通語を同一視することは当然間違いである。北京語を「京片子（生粋の北京語）」と呼ぶ人がいる。それは直感的に北京語と普通語を区分したものだ。しかし、その両者には非常に特別な関係がある。普通語を定義するなら、「北京語音を標準音とし、北方語を基礎語彙とし、典型的な現代白話文による作品を語法規範とする」現代漢民族の共通語ということになる。この定義で語音・語彙・語法という三つから普通語の基準が定められた。

ところで、北京語音はどうして普通語の第一要素である標準音となったのか。

今我々の耳に入る北京語（「老北京話（古い北京語）」ともいう）は普通語の標準音であるのか。では、列を挙げてみよう。

念秧子 niànyāngzi（人にのろいをかける）、遛弯儿 liùwānr（散歩する）、逗闷子 dòumènzǐ（ふざけあう）、崴了泥了 wǎile níle（しくじる）、搓火 chūhuǒ（気がふさがる）、套磁 tàocí（なれなれしくする）、镢子儿 没有 bèngzir méiyǒu（お金一銭もない）、杵窝子 chǔwōzi（人見知りする）、拔份儿 báfèn（威光をひけらかす）、能干儿 néngganr（“干”は轻声）（有能である）、吃挂落儿 chī guàluò（巻き添えをくう）、一口口儿 yì kǒu kǒur（ごく少量）、抽不冷子 chōubulěngzi（“抽”は三声と読む）（不意に）などを、

よその土地の人は恐らく理解できないだろう。これらの語彙又は連語は非名詞なので分かりにくいかも知れないが、名詞なら理解できるのだろうか。そうだとはいえない。もう少し列を挙げてみよう。

家巧儿 jiāqiǎor (麻雀 máqiù) (スズメ), 虎不拉 hǔbulā (伯劳鸟 bó láoniǎo) (モズ), 长脖子老等 chángbózilǎoděng (苍鹭 cānglù) (アオサギ), 铨达儿木 bēndǎrmù (啄木鸟 zhuómùniǎo) (キツツキ), 燕么虎儿 yànmehur (蝙蝠 biǎnfú) (コウモリ), 蝎勒虎子 xiēlēhuzi (壁虎 bìhǔ) (ヤモリ), 疥勒哈子 jièlēhǎzi (“哈”は hǎ と読む) (癞蛤蟆 làiháma) (ヒキガエル), 老琉璃 lǎoliúli (蜻蜓 qīngtíng) (トンボ), 呱嗒扁儿 guādapiàn (蚂蚱 màzha) (体が細くて長いイナゴ), 刀螂 dāolang (螳螂 tángláng) (カマキリ), 互帖儿 hùtiē (蝴蝶 húdié) (チョウ), 唧鸟儿 jīniǎor (蝉 chán) (ゼミ), 油葫芦 yóuhulū (“葫”は轻声で, “芦”は lū と読む) (エンマコオロギ), 蛤蟆咕嘟儿 hámāgudur (蝌蚪 kēdǒu) (オタマジャクシ), 间壁 jiè biē (隣近所), 凉白开 liángbáikāi (さゆ), 兀秃水 wūtūshuǐ (ぬるま湯), 金裹银儿 jīnguǒyínr (麦粉とトウモロコシ粉で作った饅頭), 豆儿酱 dòurjiàng (豚肉の皮やニンジン, 大豆などをゼリー状にしたもの, 前菜の一種)などは普通語だと言えるか? 明らかにそれは普通語ではない。

これによって, 北京語は普通語ではなくて, ただ中国語方言の中の一つでしかないと言える。そのため, 普通語の定義は適切ではないと指摘した者もいる。普通語は北京語音を標準音としているが, 北京人の発音はその実標準だとは思われない。これはいったいどういうわけなのか。これを究明するには北京の語音変遷を辿らなければならない。

二. 明朝以前に北京人はどういう言葉を操ったか

北京を都に定めてもう三千年あまりになり, 語音資料が不足しているので, 三, 四千年前の北京に住んでいた人々がどういう言葉を話したか, その後の秦, 漢, 隋, 唐の時代にどういうふうに話したかということは考証し難いことになったが, 少なくともいくつかの手がかりはある。北京という土地では長きにわたり底層(漢人が南下して多くの少数民族と長期に融合して, もたらした中原の漢語と当地の少数民族の言葉は互い

に浸透し、溶け合う過程を「底層」現象という一注) 方言は幽燕方言(幽燕は今河北北部及び遼寧省辺りを指し、唐朝以前は幽州に、戦国時代、燕国に属する一注) に属していた。しかし、各時期の「官話」又は当時都心部で使用した言葉は決して幽燕方言ではなく、幽燕方言そのものも不変のものではない。それなら、各時期の「官話」はどんな言葉であったのだろうか？

夏商周——雅言

秦——雅言

漢——洛語、正音、天下通語、雅言

晋——洛語、雅言、胡氏漢語

隋——長安官音、秦音

唐——長安官音、秦音

遼金——胡氏漢語、洛陽讀書音

元——大都話

明——下江官話、金陵官話、江淮官話

清——滿語、滿氏漢語、北京語、普通語

民国——國語

中華人民共和国——普通語

夏商周時代に、中原を中心とした約2～300万平方キロの範囲で、底層言語は様々存在していたが、社会にはやはり公用語があり、それは夏王朝から有った「雅言」である。「雅言」は支配階層に使用され、大部分の地方の人が理解でき、且つ正式の場所で使用した言葉だと推定される。《詩經》は周朝の雅言だと考えられる。孔子の《論語》には「子所雅言、《詩》、《書》、執礼、皆雅言也。(孔子は公用語(普通語)を使う場合がある。《詩》、《書》を読む時や礼をする時に公用語(普通語)を使う。)」と書かれている。

北京は紀元前26世紀に「坂泉の戦」の発生地(坂泉は今北京市延慶県と河北省懷来県の辺りにある)であり、「坂泉の戦」は炎帝族(農民)と黄帝族(遊牧民)が連合して、揚子江の中下流と黄河下流から来た九黎族の首領—蚩尤を打ち負かした戦である。炎帝氏と黄帝氏と蚩尤氏が中

華の三大始祖と呼ばれた。これを根拠に学者たちは以下のように考えた。即ち北京は中華民族が最初に形成されたところだったと考えたのである。その時、言葉の多様化は必然的なことであった。しかしながら、当時の北京一帯は黄帝が天下に号令したところで、夏朝雅言は北京地区で通用し、且つ役場や正式の場所で使用される言葉だと断言された。北京には商の時代に自然にできた二つの国——燕と薊があり、周の初めには琉璃河（今北京市房山区にある）で燕国の都が立てられた。それゆえ、雅言は北京で通用する言葉であるはずだと考えられた。

秦は七国を統一したが、十五年間しか維持できなかった。当時、言語方面の問題はあまり際立っていないが、文字統一の敕令だけは下された。これを「書同文」という。これには、中華文明が今日のように広められて、長江南北の人々の語音が大きく違うにも拘らず、コミュニケーションができ、古典籍を読み、文化の一致性が認められるということにおいて偉大な意味を持っている。当時、滅亡した燕で使用した幽燕方言は、地方の底層方言に属するが、上層で使用されたのは大抵雅言であるはずだと推定される。

漢は統一されてからの時間が極めて長く、前漢と後漢は合わせて400年あまりもあり、その間に漢民族が形成された。当時、漢王朝の域内で使用された正音（標準音）は依然として雅言であり、亦も「天下通語」（共通語）とも呼ばれる。しかし、漢の「天下通語」は「洛語（洛は洛水）」、即ちその当時の中原地区の洛水流域の言葉に属する。北京は秦と漢の時代に「広陽郡」と呼ばれ、北方の交通と貿易の中枢であった。その人々が使う言葉は「天下通語」に近いだろうと考えられるが、ただ底層幽燕方言のなまりはやや強い。「洛語」は大体先秦の雅言を継承した。

その後、漢民族は各少数民族との接触が増えた。魏晉南北朝の時代には、北方の少数民族が続々と歴史に記載されるようになった。紀元316年、匈奴が長安に侵攻し、晋愍帝を捕虜にして、西晋は滅亡した。317年、晋元帝司馬睿は建康（今南京）に都を定め、東晋を建国した。中原の漢民族と土族などの臣民は連れ立って南へ逃れた。史上では「永嘉之

乱、衣冠南渡（永嘉の乱、皇室南下）」と言われた。これは影響力のある中原文化の移動と拡散である。その時の洛語と伊洛方言（伊洛は伊水と洛水）はこれと同時に今の江蘇、浙江、福建などに広まった。それにより漢民族が使う語音は大きく分化した。（広東語はというと、もっと前の秦の大規模な移民に源を発する。）

隋が統一後、南、北方語音の分化によって、朝廷は「長安官音（標準音）」を使用すると定め、「秦音」ともいう。唐は隋の制度を継承した。北京は隋朝で「涿郡」と、唐朝で「範陽群」又は「幽都」と呼ばれ、「長安官音」を標準語とする地区にも属する。

宋時代の標準語は「正音」、「正語」又は「雅音」と呼ばれる。「靖康の変」の後、中原の漢民族人はまた大規模に南方に難を逃れて、史上に二回目の「衣冠南渡」とも呼ばれた。もちろん、前後二回南下した者は富裕層と知識人が割りと多い。残った人は戦争の苦難を舐めつくすしかない。

宋、遼、金が対峙した時、遼と金は中原地区からたくさんの人を強奪して今の東北、河北、北京に連れてきたことが現存の史書に多く記載されている。金にはかつて朝廷によって実施された大規模な人口移動が三回あった。これで互いに見分けがつかないように女真人や漢民族人、契丹人が雑居させられた。《金史・太宗紀》に洛陽、襄陽、潁昌、汝、鄭、均、房、唐、鄧、陳、蔡の人々は河北に移住したという記載がある。遼の時代に、北京は五つの都の一つ、即ち「南京（燕京）」になった。しかし、金朝は北京を「中都」に定めた。200年あまりに、北京（その時、北京と呼ばれない）は既に北中国の政治、経済、文化の中心となった。この二つの王朝の北京居民の中に契丹人も、女真人もいるし、数多くの漢民族人もいた。その中に続々とよそから移住してきた漢民族人も相当いた。北京、河北、東北に移住した漢民族人であり、中原地域に残っていた漢民族人であろう、彼らは少数民族と共に雑居しており、200年余りの雑居、通婚、繁栄につれて、言葉に大きな変化が生じた。漢民族人は胡語（北部、西部の異民族の言葉）を、胡人は漢語（漢民族の言葉）を学ぶことが北中国の普遍の現象であった。漢民族社会は生産力がわりと高

いし、文化も発達しており、漢語自身の発展もよりよく完璧であった。ゆえに、全体的な趨勢は胡人が漢語を学ぶことであった。しかし、契丹人と女真人は漢人とまったく同じようには発音できないが、社会地位は漢人より高い。これで漢語そのもの、特に語音も変化した。この変化によって東北地区、北京河北地区、中原地区の語音と南下した比較的純粋な漢民族言語—伊洛方言との距離は大きくなった。

各時期に南下した雅言、洛語、正音は地元の原住民の言葉と相互に融合し影響を与え合い、語音の変化もわずかにあるが、この変化は中原地区と河北、北京、東北などの漢語語音の変化よりも遥かに小さい。言い換えると、中国各地の漢語語音には、ますます際立った「口音（地方なまり）」現象が現れた—今、北方人から「鳥語（鳥の鳴き声）」（誰も聞いて分からない意）とあざける粵語（広東語）、呉音、閩南語（福建方言）であるが、その中に早期正統の漢語の特徴も実はたくさん残っているが、後の普通語を含め北方の一部の方言は少数民族の発音の影響によって形成された「胡氏漢語（胡人のなまりを混じる漢語）」である。

金時代は「洛陽の読書音」を正音にしたのである。ところが、その時の「洛陽の読書音」はもう何百年前の洛語、正音とは随分違った。

元に入ると、また少数民族が建てた王朝であり、モンゴル語は国語であるが、主に朝廷、役場と外交場合に使い、北京人の大部分は「大都話」を話す。当時、「大都話」は「天下通語」と呼ばれた。この大都話は遼、金、元三つの王朝を経て、多くの北方民族が漢語を学ぶ時の発音の特徴が溶け込んで形成された通用の漢語である。金の「洛陽の読書音」よりもむしろ当時の河北、北京一帯の漢人（ここでいう漢人は漢民族、契丹族、女真族などの人を含め、現代の漢民族人ではない）の発音の特徴を持っている。伝わってきた元雑劇、元曲から見れば、すでに現代の北京と河北の人の言語特徴にやや近くなった。そしてモンゴル族は「大都話」に貢献もあり、よく知られる「胡同」という言葉はその一例である。北京人は市の中心部にある積水潭（什刹海 shíchàhǎi）を「海子 hǎizi」と呼び、これもモンゴル語である。現在でも北海、中南海、前海、後海について言えば、なぜ十数ヘクタールの湖が海と呼ばれるかを理解できない。

それはモンゴル語「海子」の進化であるものだ。

明の初め、首都は南京にあった。その後、燕王朱棣は「靖難の役」という乱を起こして、甥の朱允炆から帝位を奪って北京に都を移した。遷都は彼の基盤が北京にあったのに加えて、都に近い北方の辺境紛争を解決するためでもあった。戦争を経て、北京の人口は大幅に減少した。朱棣は江蘇、浙江一帯から多くの官吏を北京に連れてきて、たくさんの庶民もついてきた。移民の人数は北京人口の大部分を占めていた。それと同時に朱棣はまた南方から数十万もの軍隊を北方に連れてきた。北京のその時の主な言葉は南京周辺に通用の「下江官話」と「金陵官話」に変わり、「江淮官話」とも呼ばれた。「下江官話」は実は中原土族が「衣冠南渡」の時、南方へ持ってきた伊洛方言と地元の呉語が融合した方言であり、明朝の通用官話になった。しかし、変えられないのは、戦乱の中に幸いにして生き残った北京とその近くの原住民が依然として河北、北京の幽燕方言を使ったことであり、これは河北、北京地区底層方言の土台である。朱棣は帝位を奪う戦争で河北などの人をたくさん殺して、たくさんの土地は一人もいない無人の地になって、北京の付近も深刻な影響を受けた。それで、明の朝廷は50年あまり、前後8回にわたって山西の「大槐樹の下」(移民たちが山西洪洞県にある大槐樹の下で集まって遷移する場所)から大勢が移民した。その中の一部分を北京とその近くに住ませた。現在、北京郊外には趙城營、紅銅(洪洞)營、蒲州營、長子營などの地名があり、これは現地の居民が当時趙城、洪洞などから移民したのを表している。これらの移民は自然に北京方言の形成過程に参加した。ところが、北京城内の言葉は南方から移してきた、「下江官話」を操る朝廷官吏や平民などによって左右された。イタリアの宣教師 Matteo Ricci 氏はローマ字で当時の北京語をたくさん記録した。保存されてきた記録から見れば、当時の北京語の中に多くの入声字があるが、zh, ch, sh など「翹舌音」(そり舌音)はない。これで当時の北京語は現在の北京語でもなければ、普通語でもないことを明らかにした。

三、清は我が国の現行の普通語形成の時期

清は満州族が建てた王朝である。満州族が山海関に入る前に使った言葉は満州語で、満清入関後、自分の母語を北京に持って来た。しかし、清軍入関は単に満州人が北京と内地に入っただけではない。清の軍隊は実に民族複合の形で構成されたのである。その中に満州八旗、モンゴル八旗、漢軍八旗、また朝鮮人、ダフル人、ロシア人などが含まれた。もちろん、最高の統率者は満州貴族である。

元朝モンゴル支配者が語言にあまりなすところがないのと異なり、満州支配者は入関後、言葉の問題は支配地位にとって回避できない大きな挑戦だと認識した。それにつれて、極めて有効な措置を取った。

満州族は要領をつかんで学ぶ民族である。勉強をして支配階層は皆漢語をマスターした。そして、200年あまりの支配で漢語に深い影響を与えた。今日でも中国全土で最も広範で使い、世界中で使う人数がもっとも多い普通語になった。

満清入関前後、漢人大臣は満州語を話すよう要求された。これは朝廷議事、君臣疎通の需要を解決するためである。

ところが、支配者は漢人大臣に満州語を習得させることは、入関後の多くの難しい事務記述の問題を決して解決できないのを直ちに意識した。社会、経済、生産、外交、歴史、文化、芸術、医療、科学技術など大量の事務を満州語で深く探究し、それらについて意志疎通することができないのである。満州族の発祥地よりもずいぶん複雑で、先進的で巨大な国の社会を支配し、管理するためには、漢語を学び、漢語を使うほかない。

清朝中前期到北京の言葉はとても複雑であった。皇居と政権の安全、そして満州人をしばらく漢民族の大海に溶けこませないように、朝廷は旗人（八旗に属した者、満州族のみならず）を城内に住ませ、城内に住んでいた漢民族など他民族を城外に移すという措置を取った。これを「旗民分治」（満漢分居）という。そうして当時の北京話には旗下話、土話、官話という三者共存の現象が現れた。旗下話は城内の旗人が話した満州語で、土話は城外の北京原住民が話した地方方言で、歴史上の幽燕

方言と大きな関係がある。官話は朝廷、官吏で使用して満州人の発音特徴を持っている漢語である。官話は朝廷使用の言葉なので、示範と率先的な役割がある。

八旗はずっと軍事と生活が一つの組織であるから、白山黒水（白山は長白山、黒水は黒竜江）を離れて、城内の八旗は仕方なく黄帝に従い、同じく城内に住んだ八旗漢人及び八旗満州に従属した包衣佐領（従4品武官）（三分の一くらいは漢人）や、旗鼓佐領（3品武官）（殆ど漢人）に漢語を学ぶほかなかった。これらの八旗漢人、包衣佐領、旗鼓佐領はほとんど遼東地区から来た漢民族人で、彼らが話している漢語は遼東語なので、八旗満州人が覚えた漢語には東北地方のなまりがある。満州語はアルタイ語族に属し、漢語は漢蔵語族に属して、文法は随分違うので、清初の数十年間、北京城内では大抵満族式漢語を話した。即ち、語彙は漢語で、文法は満州語語式をそのまま使用して、目的語は前に、動詞は後ろに置く。その数十年後、満族式漢語は段々少なくなり、満州人が話した漢語は声調以外は、漢民族人とほとんど差がなくなった。

満州族の高官や貴顕らは漢語を把握するにつれて、漢人大臣参内の時には、一様に「北京語」、つまり「官話」を改めて用いた。満州語はやはり国語であるが、もう「官話」ではなくなった。康熙四十九年（1710年）～五十五年（1716年）、即ち満清入関六、七十年に《康熙字典》が編纂された。この中国最初の「字典」と名づけられた漢字辞書は、韻母、声調及び音節によって韻母表及び対応する漢字を分類配列したもので、全47,035字を収録し、漢字研究の主な参考文献の一つとなった。《康熙字典》の中の語音は今の普通語の語音と一定の差があるが、他の中国方言に比べて今の普通語に極めて近いようである。《康熙字典》の出現は普通語が独立の方言として成熟したことを表した。雍正六年（1728年）、雍正皇帝は「正音館」を設け、全国で北京語を推し広めた。読書人で北京語を理解できない者は科挙を受けることはないとした。その時の北京語は大体今の普通語である。北京語は「官話」としての地位がすぐに高くなり、すでに「下江官話」に取って代わり、中国政府当局の公用語になった。

面白いことは、北京では相当長い時期にわたり言葉の「満漢兼」の現

象が現れた。つまり、漢語と満州語が五分五分で、両者は互いに語彙を取り入れ、借用する。清の末期でも、北京でこの「満漢兼」の現象を記録した「順口溜」（民間で流行っている話し言葉による韻文の一種、文句の長さは一様ではないが、非常に語呂がよいのが特徴である）が流行っている——出门先看“阿布卡”（天气），办事必说“巴尼哈”（谢谢）。见面要问“希赛因”（你好），分别互道“斋巴哈”（再见）。（出かける前に先ず「阿布卡 ābùkǎ」（天气）を見，事が終わったら「巴尼哈 bāníhā」（ありがとう）を言い，会う時に「希赛因 xīsàiyīn」（こんにちわ）を，別れる時に「斋巴哈 zhāibāhā」を挨拶しあう）。（“ ”の中の言葉は満州語）

満州族の普通語及び北京語への影響は一方は語彙に現れる。愛新覚羅・瀛生氏の《北京土話における満州語》の記載によると、確かに相当数量の満州語語彙が北京語と普通語に入った。「萨其马 sàqímǎ」（おこし風菓子の名前）がよく知られる語彙の一つである。実はもう慣れて、違和感のない満州語語彙がたくさんある。例えば、挺 tǐng（とても…だ），虎势 hǔshì（がちりしている），磨咕（蘑菇）mógū（のろい），咋呼 zhàhū（大声を立てる），咯吱 gēzhī（がちがち），抹撒 māsa（拭く），呵斥 hāchì（しかりつける），央格 yāngge（せがむ），邈里邈遑 lāilītā（だらしない），麻利 máli（てきぱきする），脖颈子 bógěngzi（颈は gěng と読む）（首），卡步裆 kǎbudāng（ズボンのまち），叮了当啷 dīngledānglāng（貧しいさま），格色 géshǎi（ひねくれる），侧歪 zhāiwai（傾く），拐跬 guāida（足元がよろめく），嬷嬷 mōmo（おばあさん），翻车 fānchē（ここで反目しあうこと），耷拉 dāla（垂れる），哈 hā（おもねる），哈虎 hǎhū（怒鳴りつける），缩缩 suōsuō（恥じ入るさま），嘟噜 dūlu（ぶつぶつ言う），盘儿靛 pánrliàng（容貌が美しい），帅 shuài（格好がいい），倒腾 dǎoteng（引っくり返す，移し替える）等等である。

もう一方で、最重要な影響は語音にもある。満州人が漢語を習得することは決して楽ではないというのは満州人が入声を発音できないためである。しかし、入声は歴史上漢語発音の重要なポイントの一つである。なぜ、古体詩を南方の呉音、広東語で詠むと韻調があって優美なのかはまさにこのためである。漢語は本来四つの声調—平声，上声，去声，入

声があり、現在、一部分の方言は七つ、九つの声調もある。普通語の生まれは固有の四声を陰平、陽平、上声、去声に変え、入声がなくなった。音調の減少は普通語の中に多くの同声字が出現させた。これは、近代多くの人が普通語の普及に反対し、呉音と広東語の回復を主張する理由である。そのほかに、満州人は zh, ch, sh という翘舌音（そり舌音）と儿化音（アル化音）を漢語にもたらした。これは明朝官話を操る漢民族人にとって、満州人が話した言葉は、漢語とは言えるが、とても聞きづらく、下手くそであった。しかし、歴史は歴史なので、二、三百年の発展を経て、この聞きづらく、下手くそな「北京語」は北京の城内に定着し、そして朝廷が全国各地に官員を派遣し、政務を取るにつれて、次第に官話になり、全国大部分の人口に普及された。人々は南方人の話を聞いたら、zh, ch, sh と z, c, s の区別がつかないのを嘲る。普通語は使われる時間が経つに従ってますます長所が現れた。普通語は音節構成が簡単で、音がよく響き、音節の区切りがはっきりしていて、リズムが強い。それに声調は抑揚があり、音楽性に富んでいる。習得者にとって、普通語は中国のあらゆる方言よりも簡単で、勉強しやすい。新中国成立後、中央政府は普通語を大いに普及させ、しっかり位置付けられて動かすことはできなくなった。

現在、語音記録があり考証できる標準普通語は清のラストエンペラー溥儀が遠東軍事法廷で審判を受けたドキュメンタリー映画にある。溥儀が法廷の質問を答えて言った言葉は標準の普通語であって、本文の始めに述べたよその土地の同胞が聞きづらい「老北京話」（古い北京語）ではない。清朝中後期、皇族と京の貴族及び城内の旗人らが話した言葉は現在の普通語には違いない。ここから分かるように、なぜ今日の北京語は普通語ではないかという点、普通語を話す人——国家政権を握った清の北京城内の貴族群体がもう無くなったためだと言える。

それなら、なぜ北京語は普通語にもっとも近いのか。これは清軍入関前、北京とその近くの河北あたりの原住民の言葉がもともと明の官話——下江官話とに大きな差があり、歴史上の幽燕方言、洛陽讀書音、大都話などが融合された後の延長線上に属しているからである。明朝二百

年あまり、下江官話はただ北京城内だけで主導の地位を占めたが、北京郊外と河北などの底層語言は歴史慣性の原因で、大体明以前の言葉の特徴を引き継いだ。こうして我々が元雜劇台本を読む時、当時の語言が現在の北京語と河北方言にそんなに近いのかに気付く。清朝中後期の官話は満州人が漢語を習得する上で形成したものである。勉強する対象は、一緒に入関した遼東地区の漢民族人もいれば、北京とその近くに住んだ漢民族人も含まれた。遼東漢民族人にしても、広義の北方（河北、山東）から遼東に行った人で、彼らの言葉はもともと河北、北京の言葉にわりと近いので、北京とその近くの河北地区の言葉は清及び清以後の三、四百年の中で、普通語（即ち雍正年に言われる北京語であり、「普通語」という言葉は1906年に現れた）から影響されることが最も多かった。それと同時に普通語に大きな影響を与えた。それゆえ、現在の北京語は普通語にもっとも近いと言える。もう一つは、満州人の底層とその子孫は消失せず、今北京に数十万満州人が住んでいる。彼らの言葉は現在の北京語語音に対して影響していることも無視してはならない。当代北京人の中には、漢民族人ばかりでなく、満州人やほかの民族人も含まれている。その中に標準普通語を話す人が相当いた。

清朝中後期の北京城内の言葉こそ現在普通語定義の中でいう「北京語音を標準音とする」標準音である。

本文で述べた普通語の形成と発展変化は一つの側面から中華民族の融合過程をはっきり映した。我が国は多民族国家であり、中華民族は多民族融合の大家庭である。民族融合の過程は艱苦に満ちた過程、ひいては残酷な過程であろうが、なんととっても各民族の人たちはほとんどが善良で助け合い、友愛を持ち、寛容であった。これは現代中華民族の共存と存続の基礎である。

※原文「漫谈北京话和普通话」の著者金荃明（愛新覺羅・啓暉）氏は北京史研究会会員、満民族文化と北京伝統文化学者で、この論文は中華全国婦国華僑聯合会の『海内与海外』2014年3月号と6月号に連載された。